様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０７３５

研究課題名（和文）英語科教員養成における教師の成長モデルの構築

研究課題名（英文）Constructing a model for pre-service professional development in English language teaching

研究代表者
高木　亜希子（TAKAGI, Akiko）

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：５０３４３６２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，省察を核とした英語科教員養成課程における履修者の1年間の学びと成長のプロセスを明らかにし，教員養成段階の教師の成長モデルの構築を行うことである。授業では，電子ティーチング・ポートフォリオと電子掲示板を活用することで，省察の機会を十分に与えた。本研究では，テキストマイニングとテーマ分析を用いて電子ティーチング・ポートフォリオ及び電子掲示板の文字データを分析し履修者全体の省察のあり方を把握した。その後，数名の履修者を抽出し，履修者の1年間の成長の過程を質的に分析した。その結果、教員養成段階の教師の成長モデルを提示するとともに，教職担当者による支援のあり方について教育的示唆を示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reveal the learning and growth process of pre-service teachers in English teaching certificate programs over one year and then construct a pre-service professional development in English language teaching model. Pre-service teachers were provided with opportunities to reflect on their learning using an e-portfolio and bulletin board system. The data obtained from their e-portfolios and weekly reflection journals on the bulletin board were analyzed using text mining and thematic analysis to investigate how the participants engaged in reflection. Then, several participants were chosen and their data were analyzed to identify their growth processes. The results of the analysis were used to develop a model of pre-service teachers' professional development and suggested pedagogical implications on how teacher educators should support pre-service teachers.

研究分野：教師教育

キーワード：ポートフォリオ　教師の成長　省察

１．研究開始当初の背景

近年，教師教育において省察の重要性が認識されており，英語教育の分野でも省察に関する研究が広まっている。その研究の多くは現職教員を対象にしたもので，教員養成ではまだ十分な研究がなされているとはいえない。振り返りの概念は，Dewy（1933）の「反省的思考（reflective thinking）」にその源を見出すことができる。また，教師教育で広く用いられている 2 つの概念は，Schön（1983）の「行為の中での省察（reflection in action）」と「行為についての考察（reflection on action）」である。しかしながら，彼らは実践に基づいた省察に重きを置きすぎているとの批判もあり，理論について省察をすることの重要性も指摘されている（Fenner, 2012）。また，専門性の向上のために，「行為のための省察（reflection for action）」も意味があり，経験の少ない教員養成課程の学生には，計画を述べたり，結果を予測したり，将来の実践について省察する機会を与える必要がある（Urzúa and Vásquez, 2008）。

筆者は，現在在勤務する大学に異動する前に，3 年間，国立大学の教員養成課程において，省察を核とした教育実践・研究を行ってきた（髙木, 2009, 2010, 2011）。具体的には，英語科教育法などの授業において，履修者に授業の省察として，毎週省察日誌を提出してもらい，一人ひとりにコメントを返したり，小グループで模擬授業の省察とディスカッションを行うなど，きめ細やかな指導を行うことができた。しかしながら，現在担当している私立大学の教職課程の授業では，履修者の人数が多く，指導に工夫が必要である。大人数であっても，知識伝達型ではなく，省察を核とした教員養成を行いたいと考え，4 年間の実践とプログラムの開発を行ってきた。このプログラムの最大の特徴は，オンライン上の電子ティーチング・ポートフォリオと電子掲示板を活用することによって，履修者同士が授業内だけでなく授業外でも活発に交流を図り，交流に基づいて省察する機会を十分に与えることが可能となることである。研究の成果として，英語科教職課程に適した電子ティーチング・ポートフォリオの内容，様式，評価方法を開発し，一定期間実際に運用した上で，プログラムの有用性が検証された（髙木，2012）。

２．研究の目的

本研究の目的は，省察を核とした英語科教員養成課程における履修者の 1 年間の学びと成長のプロセスを明らかにし，教員養成段階の教師の成長モデルの構築を行うことである。授業では，電子ティーチング・ポートフォリオと電子掲示板を活用することによって，省察の機会を十分に与える。本研究では，テーマ分析とテキストマイニングを用いて電子ティーチング・ポートフォリオ及び電子掲示板の文字データを分析し履修者の全体像を把握する。その後，数名の履修者を抽出し，Thinking at the Edge (TAE)という質的研究手法を用いて，履修者の 1 年間の成長を質的に分析する。混合研究により教員養成段階の教師の成長モデルを提示するとともに，教職担当者がどのように履修者を支援すればよいか教育的示唆を示す。

３．研究の方法

26 年度は，1 年間電子ティーチング・ポートフォリオ，電子掲示板のデータ，省察レポート，学期末授業アンケートを収集した。掲示板データの分析についてテーマ分析を行い，履修者全体の学びの特徴を明らかにした。

27 年度は，26 年度の結果を踏まえ，授業改善をした上で 26 年度に引き続き文字データ収集と授業アンケートを実施し，テキストマイニング分析を行った。また，2 年間のデータをまとめ，複数の履修者を対象とした質的研究の準備をした。また，テキストマイニングの専門家及び現職教員の意見を得た。

28 年度は，複数の履修者を抽出し，1 年間の成長のプロセスを把握するため，それぞれの履修者のポートフォリオ，掲示板，面接データについて質的分析を行った。3 年間の研究結果から明らかになった成長モデルの構築を試みた。

４．研究成果

⑴ 26・27 年度の授業の概要

授業は前期 15 週，後期 15 週の計 30 週で，英語教育の理論的考察に加え，具体的な学習活動の事例を理解し，有機的な授業設計ができることを目指した。1 年間の授業において，前期は「学習指導要領と英語教育の目的」，「国際語としての英語とコミュニケーション能力」，「英語教育における文化」，「学習者論」，「教師論」などの理論的テーマを扱い，後期は「リーディング指導」，「スピーキング指導」，「言語材料の指導」，「評価」などの実践的テーマを主に扱った。できるだけ履修生の能動的な学びを促すために，90 分の授業の構成は，講義が半分で，残り半分は履修生同士によるディスカッションとディスカッション内容の共有，活動体験，ビデオ視聴などであった。

授業では省察を促すことを重視し，授業テーマに関する毎時間の履修生同士のディスカッションと『言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）【英語科教職課程編】』の使用を行った。また，毎授業後，各履修生に授業の省察を電子掲示板に投稿することを課した。

⑵ 授業における J-POSTL の活用

授業では，補助教材として J-POSTL を活用した。1 年間の授業の最初に，紙媒体の J-POSTL を配布し，J-POSTL の背景，目的，意義について説明した。その後，授業外の課題提出用に，大学が管理する授業支援用のポータル内で電子版の J-POSTL を配布した。

授業開始後 1 カ月以内に，自分自身についてのセクションを記入したものを電子ファイルで提出させた。また，ポートフォリオの「『言語教師のポートフォリオ』について(pp. 1-2)」,「『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ（EPOSTL)』の序論から（pp. 3-4)」,「本書の使い方（pp. 5-7)」を読ませ，自己評価記述文に基づく省察を各自行った後，記入された自己評価記述文と，自由評価記述文に基づき省察したことや考えたことを記述したワードファイル（A4 半ページから 1 ページ程度）を提出させた。

授業における本課題の目的は, 2 点あった。１点目は，J-POSTL の背景，目的，意義について確認し，英語教師として求められている資質能力の全体像を俯瞰することだった。２点目は，英語授業力を支える知識や技術についてほとんど学習していない段階の各自の授業力を認識させることであった。

授業中には，授業で扱ったテーマに関する自己評価記述文をいくつか選び，履修生同士でディスカッションをすることで，各記述文について，より深く省察する機会を 5 回設けた。なお, その際に取り上げた記述文は, I. 教育環境，C. 言語教師の役割の 2 項目，IV. 授業計画，B. 授業内容と V. 授業実践，C.学習者とのインタラクションにおける学習者に関する 4 項目，II. 教授法，A. スピーキング活動の 6 項目, C. リスニング活動の 5 項目，D. リーディング活動の 7 項目であった。

1 年間の授業の最後には，2 回目の授業外課題として，自己評価記述文に基づき省察を各自行わせ，記入された自己評価記述文と，自己評価記述文を通して省察したことや考えたことを A4 半ページから 1 ページ程度記述したワードファイルを提出させた。本課題の目的は，1 年間の学びの進捗を確認し，現在の課題について認識させることであった。

⑶ 研究課題

26 年度は，以下を明らかにするためにテーマ分析を行った。

①英語科教職課程の履修生にとって，J-POSTL は省察を促すためのツールとして有効であるか。

② 1 年間「英語科教育法特論」の授業を受講した後，J-POSTL の自己評価記述文を用いることで，どの部分に焦点を当て，何について省察を行っているか。

⑷ 対象データ

対象データは，2 回目に提出された J-POSTL の自己評価記述文に基づいた省察レポート（76 名分）である。分量は，一人あたり A4 で半ページから 1 ページ（約 550～1200 文字）であった。なお，本省察レポートは，授業の課題の一環として課されたものであり，研究のデータ収集を第一の目的としたものではない。言い換えれば，通常の授業の営みの中で得られたデータであり，そこから履修生の省察の具体的内容をみとろうとするものである。履修生の自己評価記述文の記入内容そのものからは，履修生の省察の具体的内容は分からないため，各履修生がどの部分に焦点を当て，何について省察を行っているかを探るために，省察レポートをデータとして用いた。なお，倫理的配慮として，受講者から，データを学術目的に使用することについて承諾を得て，匿名性を担保した。

⑸ データ分析方法

データ分析方法として，テーマ分析（thematic analysis）を用いた。テーマ分析とは，テキストデータの記述から重要なものとして浮かび上がってくるテーマを探究する方法である。本分析方法を用いた理由は，履修生が記述した全てのテキストを詳細に読み込み，履修生が行っている省察の具体的内容について，テキストからテーマを探索的に見出すためである。省察内容が，J-POSTL の自己評価記述文の 7 つの分野に対応しているとは限らないため，テキストを J-POSTL の自己評価記述文の枠に当てはめて分類するのではなく，データからテーマを見出すこととした。

分析を始める前に，全ての文章を何度か読み込み，できるだけデータに浸って全体の感じをつかむようにした。分析にあたって Guest, MacQueen, & Namey（2012）が示す用語の定義を用い，その分析手順にしたがった。

まず，テキストを一つの意味の固まりごとに切片化（segmentation）し，エクセルファイルに入力した。各テキストは 4～15 のセクションに切片化され，全部で 581 の切片となった。次に，意味の固まりを読みこみながら，テキストが意味するテーマを探り，コードブックを作成していった。テーマ分析で使用するコードブックには，研究者によりいくつかのバリエーションがあるが，本研究ではコード，コードの定義，具体例を記載した。ある程度コードブックが出来上がった段階で，再びテキストを読み進め，テキストにコードを付与していった。コードブックを作成する段階で必要性を感じたので，コードの下位項目であるサブコードも設定した。

⑹ 分析結果

分析の結果，「全体的な気づき」，「身についたこと」,「身についた理由」,「現在の課題」,「課題の理由」,「今後の抱負」の 6 つの大きなテーマと 85 のサブテーマが浮かび上がってきた。

「全体的な気づき」とは，特定の自己評価記述文には言及せずに，J-POSTL に取り組んでいる最中に感じたこと，取り組んだ後に感じたこと，1 回目と 2 回目の自己評価記述文の評価の比較をして全体的に気づいたこと，のいずれかについて記述されたものである。本テーマでは，10 のサブテーマが浮かび

上がり，最も多かったのは 1 年間の「成長の実感」に関するものであった。　また，1 回目と 2 回目の自己評価を比較することで,「身についたことと課題の明確化」を行った履修生が複数いた。課題にのみ言及していた履修生と比べて，身についたことと課題の両方を述べていた履修生が多かったことから，履修生の多くは現在の自分の強みと弱みをある程度把握できたと考えられる。

1 年間で身についたこと，成長したこと，できそうだと具体的にイメージできること（テーマは「身についたこと」）について，21 のサブテーマが出てきた。履修生により，「身についたこと」は異なっており，多岐にわたっていた。自己評価記述文の 7 つの領域のうち，領域名のみに言及する履修生もいれば，領域の中の小項目，または複数の具体的記述文を例として挙げ，身についたことについて記述している履修生もいた。特に顕著に頻度が高い領域はなかったが，以下の例に示すような「教授法（II）」に関する項目,「教育環境（I）」における「目標とニーズ（I・B）」に関する項目および,「授業計画（I）」に関する項目が他と比べてやや多く言及された。

「現在の課題」とは，現在自分に備わってない，不足している，自信がない，不安に感じる資質能力の課題について言及した記述である。これらの記述の頻度は,「身についたこと」と比べて約 1.8 倍あった。「身についたこと」と同様に,「現在の課題」は履修生により異なり，多岐にわたっており，26 のサブテーマが浮かび上がってきた。共通して多く挙げられているサブテーマがいくつかあり，最も多かったのが,「実践力」であった。教職課程の授業を通し知識は増えているものの，実践できるかどうか自信がなかったり，実践できるかどうか判断に迷う項目があるという記述である。

「今後の抱負」とは，課題等を踏まえ，今後自分がどのようなことをやっていくべきか，教育実習に向けてどのような準備をしたいかを述べた記述である。課題とほぼ同数の頻度の記述があり，19 のサブテーマが浮かび上がってきた。最も多かったのが,「省察の継続」であり，本授業後や大学卒業後も省察を習慣づけたいという記述や，J-POSTL を活用し続けたいという記述があった。

(7) 考察

①省察ツールとしての J-POSTL の有効性

分析結果によれば，J-POSTL の自己評価記述文による自己評価に基づき，それぞれの履修生が 1 年間の学びを省察し，具体的に身についたことと課題に言及するとともに，課題克服や資質能力向上のために今後の展望を述べていた。1 年間の教職課程の授業を通して，英語教育の理論に関する知識を増やし，具体的指導のイメージができるようになったため，第 1 回目の自己評価と比べて，第 2 回目は，記述文のより深い理解に基づいた自己評価が行われた。また，多くの履修生が，J-POSTL を活用し省察の継続を行いたいと述べていた。したがって，Bagarić（2011）や Ingvarsdóttir（2011）の EPOSTL の活用に見られた有効性が，J-POSTL にもあることが示唆された。また，Newby（2012）の示す 7 つの優れた実践のうち,「教師教育の省察モードを支援すること」,「学習と教授の論理的根拠とアプローチを支援すること」,「教師教育の領域と目的を透明化すること」,「資質能力を明確にすること」,「自己評価のツールを提供すること」の 5 つは機能したと思われる。

以上のことから，卒業後，実際に教職に就く者が少なく，履修生間の動機づけが異なる理論中心の講義においても，J-POSTL を早い段階から取り入れ，省察を促すことは意義があると考えられる。また，教員養成課程の段階で J-POSTL を用いることで，省察の意義を認識させ，卒業後も省察の習慣を継続させる可能性がある。

②省察の具体的内容と焦点化

記述文の数が多いため，履修生は，全ての記述文について均等に省察したとは考えにくく，各自が重要だと思われる領域や項目を選択して省察を行ったと推察される。実際，全てのレポートの構成を概観したところ，「全体的な気づき」のみを記述したものはほとんどなく,「身についたこと」,「現在の課題」のいずれか，および両方のテーマが含まれているレポートが多かった。また，6 つのテーマのうち,「身についたこと」と「現在の課題」については，浮かび上がったサブテーマが J-POSTL の 7 分野や下位項目と対応していた。履修者は，J-POSTL による振り返りを授業の始めと終わりの 2 回行うことで，1 年間における資質能力の向上や成長，自己評価記述文についてのより深い理解，英語教育全般の知識の増加を実感している。その上で，各自が 1 年間を通して身につき，成長したと感じられた箇所と，現在備わってない，自信がないと感じられた箇所に関して省察を行っている。このことから，J-POSTL は，具体的な授業力に焦点化し，履修生の省察を促す働きがあること示唆される。

③省察の具体的内容から見られる実践面の課題

履修生が，成長したり，身についたりしたと表明した項目において，成長や学びが感じられた根拠は，大学の講義での学習および 1～2 回程度の模擬授業経験であった。塾等での指導経験や大学外での授業観察について述べた履修生はごく少数であり，日本の私立大学の教職課程の履修生にとって，大学で学ぶ教職の授業が，教育実習の準備として重要な役割を果たしている。また，自ら授業外の機会を活用して学びを深めようとする履修生は少ない。したがって，多くの履修生が課

題として述べているのは，実践力の不足であり，現在のカリキュラムでは，教育実習までに実践面に関して自信を持てるほど十分に資質能力を身につけることは難しいことが推察できる。筆者の週 1 回 90 分の授業で，全ての分野は網羅できない。履修生は，授業で重点的に扱った部分については，自信をつけているものの，そうでない部分については課題として認識している。このことから，履修生の自己評価を授業内容の改善に役立てる可能性も示唆される。なお，評価など教育実習においても実践が難しい領域については，教員養成課程の段階でどの程度取扱うべきか検討が必要であろう。

実践の不足については，今後の抱負にも現れており，教育実習までの課題の克服や資質能力の向上について，具体策に乏しく漠然と抱負を述べている履修生が多い。また，教育実習のみが実践の場と考え，それまでの準備については言及せず，教育実習において課題を克服したいと考えている履修生もかなりいた。しかしながら，教育実習期間は短く，実習先の指導教諭及び生徒に負担をかけるため，教育実習までの事前準備を充実する必要がある。実習前までに，実践面についてどう準備をしてよいか具体策を述べた者は少なかったが，実践そのものはできなくても，本を読むなどして知識を増やしたり，英語運用能力を向上させたいと考えている者も複数いた。今後，海外の教員養成課程に見られるような理論と実践を往還するようなカリキュラムへの改善が望まれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①髙木亜希子(2016). 質的研究におけるリフレクシビティについての一考察『青山学院大学教育人間科学部紀要』，査読無，7, 127-138.

②髙木亜希子(2015). 英語科教職課程履修生による省察ー言語教師のポートフォリオ J-POSTL を用いてー『言語教師教育』，査読有，Vol.2 No.1 59-77.

③髙木亜希子(2014).英語科教員養成における省察の意味とは何か『JACET 言語教師認知研究会研究集録 2014』，査読有，60-74.

〔学会発表〕（計４件）

① Takagi, A.(2015). Encouraging pre-service teachers to use the Japanese Portfolio for Student Teachers of Language (J-POSTL) for reflection. CULI International Conference，2015 年 10 月 29 日，Pullman Bangkok King Power，バンコク（タイ王国）

②髙木亜希子（2015).「英語科教職課程履修生による省察—言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）を用いて—」第 45 回中部地区英語教育学会和歌山大会, 2015 年 6 月 28 日，和歌山大学（和歌山県・和歌山市）

③Sakai, S.,& Takagi, A. (2014). Developing and implementing J-POSTL. JALT FLP SIG Conference，2014 年 5 月 31 日，中京大学（愛知県・名古屋市）

④髙木亜希子(2014).「英語科教員養成における省察の意味とは何か」第 2 回 TAE 質的研究国際シンポジウム，2014 年 5 月 10 日，法政大学（東京都・千代田区）

６．研究組織

(1)研究代表者

髙木　亜希子（TAKAGI,Akiko）
青山学院大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：5034629